

【主題】 文章が読め、文章が書ける力をすべての子どもに保障する漢字教育

【副題】 ～『子どもの主体を起こし、文章で行う「読み優先の漢字教育」』の教材を活用した実践～

【学校・団体名】 滋賀県大津市立坂本小学校

【役職名・氏名】 講師・深田 浩美

1 はじめに

漢字の指導といえば、新出漢字の読みと書き順を簡単に教え、後は漢字ドリル等を使ってひたすら反復書き練習をさせることだと思い込んでいた。しかし、新出漢字を練習させ習得したかのように見えても、日ごろ文章の中ではなかなか使えない。漢字は覚えているはずなのに、文章となると漢字を使おうとしない。書く練習をしている漢字の読み方を読めない子もいた。なぜそうになってしまうのか。その原因を深く探ることもせず、反復書き練習の指導を続けていた。

そんな折、「読み優先の漢字教育研究会」（以降、研究会という）に出会った。この研究会が提唱するのは、「読み書き同時進行」の学習ではなく、読めるようになってから書きの練習を始める「読み優先」である。

読み書き同時進行ではなく、読み優先で行うという発想は新鮮であり、全く合理的でもあると思った。このやり方なら漢字の読み書きにつまずき学習そのものからドロップアウトしかけている子どもたちも、スムーズに漢字習得が可能になるのではないかと考え、いくつかの教材を使用し実践を始めてみることにした。

また、この研究会の目指すところは、「文章の意味が正しく読み取れること。伝えたいことが正しく文章で書けること。」であるという。本当に漢字が読めたら文章が書けるようになるのだろうか。そのことについても検証してみたいと考えた。

2 使用した教材

(1) 「一日一漢字」(資料1)

漢字の成り立ち、読み、文例、筆順までをコンパクトに学ぶパワーポイント教材。

(2) 「漢字音読名人」(以降、「音読名人」という)(資料2)

漢字交じり文の音読に習熟させる教材。表ページのルビ付き例文で練習し、子ども同士の聞き合いとチェックをしながら、裏ページのルビ無し例文が確実に読めるようにしていく。

(資料1) 【一日一漢字】



(資料2) 【漢字音読名人】



(3) 「漢字書き名人」(以降、「書き名人」という)(資料3)

単漢字練習、読みのおさらいをした上で「音読名人」の例文を素材に、文章の中で漢字を書く練習をする。新出漢字とその熟語だけでなく、多くの既習漢字の復習もできる。そして、その漢字を使った創作文作りも行う。

(資料3) 【漢字書き名人】 ←



3 取り組んだ時間とその概要

坂本小学校では、昼休み後に15分間の帯での学習時間(坂本タイム)がある。その時間を中心にこの漢字教育に取り組むことにした。

まず、最初の1週間は、「一日一漢字」のみ学習を進め、家庭学習等で「音読名人」の音読練習を進める。第2週から、「音読名人」の子ども同士の聞き合いをスタートさせる。このように始まりをずらすことで、漢字の「読み・意味理解」を踏まえた音読練習が可能になる。さらに、「書き名人」を使った書きの練習は、その日学習した漢字ではなく、1週間前に学習した漢字とする。以上で読み・意味理解の確実な習熟の上での書き練習に至らせるという学習過程となる(資料4)。

家庭学習では、「書き名人」のプリント学習、「音読名人」の音読練習を行う他、「読書」も課題とした。漢字学習と読書をセットにすることで、相乗的な効果が生まれると考えたからである。

(資料4) 坂本タイムと呼ぶ帯時間を利用した実施スケジュール

坂本小標準スケジュール (6年生の例)							
曜日	坂本タイム (15分)				家庭学習		課題提出
	音読名人	一日一漢字	音読名人(斉読)	書き名人	書き名人	読書	書き名人
(仮)	聞き合い	文作りを子どもから引き出す	言葉の意味をしっかりと理解させる	表上段	残り=表下段と裏	好きな本	提出前子ども同士チェック
11月5日	なし	視・穴	→ 斉読・意味確認	なし	なし	「読書カード」に記入し翌日提出	なし
火	なし	砂・腹	→ 斉読・意味確認	なし	なし		なし
水	なし	段・並	→ 斉読・意味確認	なし	なし		なし
木	なし	降・読	→ 斉読・意味確認	なし	なし		なし
金	なし	洗・異	→ 斉読・意味確認	なし	なし		なし
6月10日	スタート	純・射	→ 斉読・意味確認	視・穴	視・穴	なし	なし
火	その子のペースで	背・舌	→ 斉読・意味確認	砂・腹	砂・腹	視・穴	視・穴
水		乱・域	→ 斉読・意味確認	段・並	段・並	砂・腹	砂・腹
木		蔵・展	→ 斉読・意味確認	降・読	降・読	段・並	段・並
金		訪・我	→ 斉読・意味確認	洗・異	洗・異	降・読	降・読

4 具体的な実践内容

(1) 「一日一漢字」～子どもの知的好奇心・漢字を学ぶ楽しさを引き出す～

パワーポイント教材を使い、まずは、新出漢字の成り立ちについて子どもたちと一緒に教師も謎解きを楽しむ。漢字の成り立ちや意味を知ることによって子どもの漢字への興味関心が高まった。

・一日一漢字で漢字の成り立ちを学習することで、漢字の持つ意味が分かり漢字に興味を持つようになった。
(学習後のアンケートより)

次に、読みを確認し例文を読んだ後、近くの子ども同士でその漢字を使った文を考え、伝え合う(資料5)。この文作りによって、漢字が子どもの脳裏に生活体験のイメージとして定着していく。また、自分の考えた文を互いに聞き合うことで、主体的で対話的な学びの力も育っていった。



(資料5) 子ども同士で文作り

子どもたちの作った文は、いくつかホワイトボードに書き留め、朝の会や帰りの会で読んで復習した。自分の作った文をみんなが読んでくれることによって、自分の存在価値を確認し自己肯定感も育まれた。

さらに、例文の言葉の意味は、子どもに担当の漢字を割り当て、前もって調べておくように指示した。そして、担当漢字の「一日一漢字」が終了した後に発表するという形式をとった。自分の調べたことがみんなの役に立つという思いから、例文に無いたくさんの熟語を調べて発表する児童も少なくなかった。また、調べたことをタブレットに入力させたことで、ローマ

字入力促進につながり意欲が高まった。

最後に、一画ずつ黒く変わっていく筆順の動画を見ながら、体全体を動かして書き順を確認していく。さらに、「正しい筆順になっているか、友達同士で見合いましょう。」と声をかけ、意識的な練習にすることで脳裏へのインプットがより確かなものになった。

(2) 「漢字音読名人」～読みの習熟と交流～

「音読名人」の表ページのルビ付き文章で練習した後、裏ページのルビ無し文章でも正しく読めるかどうか複数のクラスメートに聞いてもらう。正しく読めていたら合格サインをもらい次に進んでいく(資料6)。子ども同士3回チェックを基本としているが、読みが苦手な子には、1回もしくは2回のチェックでOKという配慮もした。



(資料6) 音読名人の聞き合い

この活動は、一連の漢字教育の中でも一番活発である。ふだんの学習活動では、学力低位の子どもと高位の子どもが対等に教え合う場面は少ない。しかし、「音読名人」の聞き合いでは、クラスの誰とでも対等に聞き合うことができ判定者として主役になることができる。子どもたちは対等な関わり合いの中でクラスでの居場所を見つけ、所属願望が満たされ、自己肯定感を育んでいく。毎日たった5分間程度だが、子どもたちは楽しそうに生き生きと取り組んでいた。

- ・音読名人で、難しい漢字も読めるようになった。
- ・音読名人で知らない言葉にであって知識が増えた。
- ・音読名人のおかげで、すらすら文章が読めるようになった。
- ・いろいろな人に聞いてもらえたから、クラスの友達との仲が深まった。(学習後のアンケートより)

(3) 「漢字書き名人」～文章が書けるようになる～

「書き名人」では、その日「一日一漢字」で学習した漢字ではなく、1週間前の漢字を練習する。今まで読み書き同時進行で漢字を教えてきた私にとっては、最初は不安だった。しかし、子どもたちは「一日一漢字」で新しく学習した漢字と違う漢字の「書き名人」をすることに何の抵抗も感じなかった。むしろ『この漢字は、もう読めるし知っているから書けるで』と、スムーズに書きの練習をしていく。読み書き同時進行より、確実に読めるようになってから書く練習をする

「読み優先の漢字教育」の正しさを子どもたちの学びの姿が実証してくれた。

まず「書き名人」では、表ページの単漢字のおさらし練習と読みの確認を行う。この時、読みが書かれている部分を伏せて取り組むことが大切で、やった後に子ども自身で確かめさせる。

次に、正答部分を隠して平仮名文だけを見て、漢字交じり文を書き、書き終えてから自分で確かめさせる。これは、脳裏に文のイメージを確かに持った上で書かせるためである。それが文章を書く時の本来の形なのだ。

裏ページにある3例文とチャレンジの文章は、翌日子ども同士でチェックをする(資料7)。漢字の丸つけを子ども同士にさせることについては、抵抗があった。丸付けは教師の仕事という固定観念があったからだ。しかし、子どもに任せてみると、見事にやって



(資料7) 書き名人の子どもチェック

のけた。チェックミスをしそうな漢字については、予めチェックポイントを示しておけば、難なくチェックできていた。担任は、チェックされた裏ページをさつと確認するだけで済む。書き名人でも、子ども同士のチェックをさせることで、対等な1対1の関係性を育むことができ、自分の居場所として学級を感じられるようになる。また、学習は、先生から教えてもらうものではなく、自分で気づき学んでいくものだという自学の力も育っていく。

◎子どもたちの「書く力」を高めた創作文作り

「書き名人」の学習で最も成果があったのは、裏ページの終わりにある「この漢字を使った文を考えて書こう」である。最初は、ただ自由に文章を作らせていただけだったので、例文を真似たような文章ばかりだ

書き名人 チャレンジで使ってみよう

①主語を指定
先生は、お父さん・お母さんは、祖父・祖母は、兄・姉は、弟・妹は、犬・猫は、など

②接続詞を指定
順接(だから・それで・すると)
逆接(しかし・それでも・ところが)
並列(また)
列挙(まず・最初に・次に・最後に)
選択(または・それに・しかも)
追加(そして・それとも)
説明(なぜなら)
補足(そのためには・それには)
言い換え(つまり)
その他(それにしては・それにしても)

③使ってみよう表現を指定
ふと見ると・よく見ると・耳をすますと
振り返ると・まるで〇〇のように(ううな)
見上げると・その時です

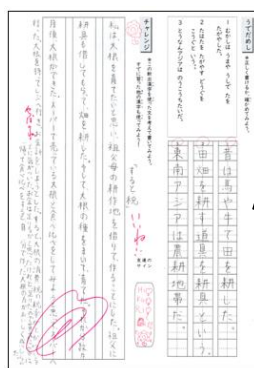
④その他
・漢字の字数を指定
・該当漢字以外にもう一つ漢字を指定

(資料8) お題を独自にまとめた一覧

った。これでは漢字の力や文章力につながらないと思い、「お題」(主語や接続詞を指定)を与えて文章作りに取り組みさせた(資料8)。

すると、面白いほどに子どもたちの文章が変わった。この取り組みによって、子どもはまず、書く前に当該漢字とお題を組み合わせるためのイメージを固める必要がある。それがゲームのような知的刺激をうみ、子どもに主体が起き、楽しんで作るようになった。そして、活発に思考が働き、少し複雑なストーリー性のある文章を書く力が子どもについてきた。ほんの数行(100字~200字程度)の文章だが、毎日の積み上げは大きな力になったと思われる(資料9)。

また、チャレンジ文を数人ずつ紹介したことも子どもたちの創作意欲を高めた。子どもは皆の前で読まれることを期待し、その期待が文章の質を上げていった。その他に、学級通信で紹介したり教室に掲示したりもした。



(資料9) 書き名人裏ページ

この他にも、該当漢字以外にもう一つ漢字を指定し

私は、大根を育てたいと思いい、祖父の耕作地を借りて作ることにした。祖父に耕具も貸してもらって畑を耕した。そして、大根の種をまいて育てた。それから数か月後大根ができた。スーパーで売っている大根と食べ比べをしてみようと思つてスーパーへ行った。大根を持ってレジへ行き、お会計をしようとした。すると、大根の消費税の税率が上がっていることに気がついた。お金が足りるかと思つたけれど、足りたので買った。家に帰って食べ比べをすると、自分で作った大根の方がおいしく感じられた。

たり、「〇字以上の漢字を使おう」と漢字数を指定したりもした。複数の漢字を指定することは、かなり高度なのだが、それが一層子どもたちの知的好奇心をくすぐり、より表現力の高まった創作文になったのには驚かされた。

- ・文章を書くのが楽しくなった。
 - ・文章がすぐに書けるようになった。
 - ・文章に漢字を書くのが面倒だったから全然書けなかったけど、最近は書くようになった。
 - ・1~4年生の漢字で書ける漢字が増えた。
- (学習後のアンケートより)

5 成果(子ども・学級の変容)

①漢字習得率の向上

市販の漢字まとめ(50問)テストの結果は、1学

期平均74点だったのが、89点まで伸びた。そして、70点以下が9人から6人に減り、90点以上が6人から10人に増えたのも大きな成果である。

②文章の早い書き出し

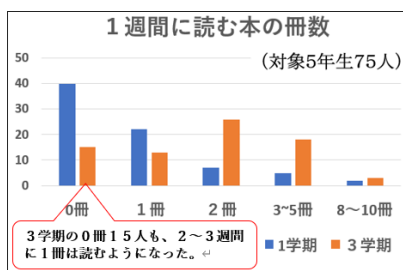
年度当初の子どもたちは、文章がなかなか書けない、書いた文章も上手いとは言えない子どもたちであった。ところが、徐々に、『文章の書き出しが早くなった。』『文章表現も上手になった。』と感じた。それは、国語科だけではなく、算数科等で自分の考えを書く場合にも感じられた。進学先の中学校の先生から、「この漢字教育を受けた1、2年生の生徒は、文章が上手いですね。」と言っていた。

③グループでの活発な話し合い

1学期は、班での話し合いをしても自分から話すことが苦手な子どもが多かった。しかし、「音読名人」と「書き名人」で育んだ対等な一対一の関係性を通して、クラスの男女ともより一層仲が良くなり、学級の雰囲気も非常に良くなった。そのおかげで、子どもたちは安心して学習に取り組めるようになり、他教科での話し合いにも積極的に関われるようになった。主体的に学びに向かう姿勢が育成されたといえるだろう。

④読書量の増加

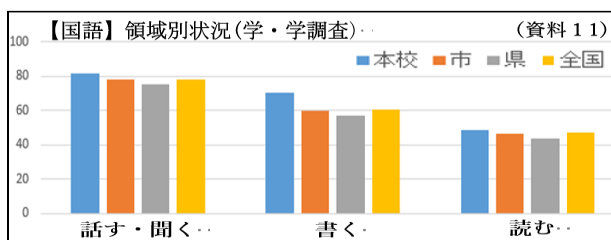
本をあまり読まない子は読書の楽しさを知らないため、読めと言われても読まない。そこで、宿題として読書に取り組み



(資料10) 1週間に読む本の冊数・1学期と3学期

てみた。「音読名人」で漢字交じり文を大量に読んだことにより、漢字が読めるという自信から本を手取ることへの抵抗感が少なくなり、今まで本らしい本を読んだことがなかった子どもたちも読もうとするようになった(資料10)。

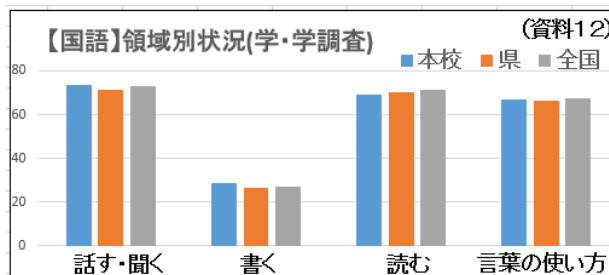
⑤全国学力・学習状況調査の結果



学・学調査の結果にも成果が反映された。この漢字教育に取り組み始めて1年後の2021年度の学・学

調査では、国語、算数ともに全国平均を上回る結果が出た(資料11)。特に、国語の漢字や書くことのポイントが高かった。また、算数の「30mを1とした時、12mが0.4にあたる訳を書きましょう。」という記述式で答える問題でも、全国平均を上回った。

更に、低学力が課題であった今年度の6年生においても、国語、算数ともに全国平均並みの結果が出た。今年度も、国語の書くことのポイントが高かった(資料12)。算数の「選んだわけを言葉や数を使って書く」記述式の問題でも、全国平均を上回った。そして、国語、算数ともに、無回答率が全国より低くなった。



これらの事実は、この漢字教育が「子どもたちの学ぶ意欲を引き出し、確かな文章力を育て、その力は他教科にも及ぶ」ものであるということを実証するものである。

6 おわりに

漢字の意味、成り立ち、読み、多様な使い方を伝えられた上で、漢字が読めれば文章が読める。文章が読めれば、知的好奇心に満ちて自ら学びを求めていく。そんなふうにして子どもたちは、自分の考えを文章で書けるようになっていった。正に漢字が読めるようになったことで文章が書けるようになったのである。そして、居場所、友だちとのコミュニケーション等、人権教育や学級作りにもつながった。主体が起き自ら学びを求めていく子どもを6年間で育てることが大切であると痛感した実践でもある。

そして、この漢字教育は、短時間、毎日行うことで確かな学力として子どもたちに定着していくことが実証できた。そのため、現在の坂本タイムのような帯時間の確保が重要である。

これまでの取組の成果に確信を持ちつつ、より一層この教材の効果的な使い方を深め、主体が起き自ら学びに向かう子どもの育成に努めていきたい。

引用・参考
 ・研究会ウェブサイト「楽しく学べる漢字の部屋」
 ・上野芳樹氏「子どもの主体が起き、どの子も無理なく習得できる読み優先の漢字学習」令和3年度白川静漢字教育賞受賞論文
 ・井上知子氏「文章を基礎に置いた読み優先の漢字教育」令和3年度白川静漢字教育賞受賞論文